



Title	コンピュータ支援の日本語教育：漢字学習における活動
Author(s)	新庄, あいみ
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2011, 11, p. 41-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70304
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

コンピュータ支援の日本語教育

～漢字学習における活動～

新庄 あいみ（大阪大学 サイバーメディアセンター）

私は留学生に日本語を教えている。留学生の言語・文化的背景は様々であり、専門分野も多岐にわたるが、かれらの興味関心は共通している。それは「日本」にかんすることだ。日本から遠く離れた国の留学生であっても、日本について驚くほどの知識を持っている。書籍からの知識のほか、特に出版物からは得にくい日本の「今」については、インターネットを通じて手に入れた知識が多い。つまり、私が教えている学生はコンピュータを使って情報を得ることに慣れていて、またヴィジュアルの有無に敏感である。そのような理由もあって、CALL 教室で授業をするときは、生の情報や視覚情報を取り入れることを心がけている。本稿ではその事例の一つとして漢字学習における活動を紹介したい。

鈴木(1998)が例えるように、表意文字である漢字は、それを見れば意味が理解できる「テレビ」のようなものであり、表音文字であるアルファベットは、意味を成すまとりまり全てを捉えなければ理解しにくい「ラジオ」のようなものである。よって、漢字を用いる日本においては、中国や台湾などの漢字圏出身者や中華系のアイデンティティを持つ留学生は標識や看板などを見て「何となくわかる」という場面に出くわすことが多い。日本人が中国や台湾で感じる気持ちと同じである。漢字が理解できるということで、たとえ日本語をほとんど学習したことがなくても、日本語で書かれている文章の大意を把握することは可能である。しかし、漢字を文字通り「一」から学習し始める非漢字圏出身者にとっては、漢字は目の前に立ちのぼる高い壁だ。漢字は、絵とも文字とも区別のつかない記号の羅列でしかない。文法を身につけ、会話を楽しめるようになって、漢字は苦手だという声をたびたび耳にする。現在日本では2000字くらいの漢字が使われているが、漢字には音読み・訓読みの違いがあり、読み方がいくつかあるため覚えなければならないことは多い。漢字の勉強を始めてもなかなか纏まった文章

が読めるようにならないことから、漢字学習のゴールが見えなくて、漢字を嫌がる学習者は少なくない。

そこで、クラスにおける漢字学習の目的を「読み」「書き」の両方ではなく、「読み」に絞ることにした。大学・大学院での研究が目的の留学生に必要な漢字のリテラシー能力は、文献を読むこと、そして論文など研究成果を公表するための文章を作成することである。また、昨今コンピュータの利用が進み、論文作成において漢字を筆記するというスキルは問われなくなっている。ペンを持って漢字を書くよりも、ペンをパソコンに変え、打ち込んだひらがなを適切な漢字に変換できるかどうかが必要とされる。よって、読み・書き能力のうち、学生が最も必要とするスキルは「読む」能力ではないだろうか。

もちろん漢字を覚えるために「書く」という作業は必要であるので、漢字の書き順サイトを紹介し、自習学習用の漢字なぞり書きプリントは配布する。しかし、毎回30分程度の時間を割く漢字学習での「書く」という作業は、漢字の基本的なストロークの練習以外は止め、コンピュータを用いて漢字を「認識する」活動を行っている。

授業の準備として、テキストにある学習目標漢字の語彙(20から30単語)をwordファイル1枚につき1単語ずつ入力しておく。この時点では、漢字にはまだルビは振らない。授業では準備したファイルを画面に提示し、学生に知っている漢字があるかどうかを尋ねる。さらに、既習の漢字と共通するもしくは類似する字形エレメントがあるかどうかなどを質問し、漢字の字形の識別や構成などを確認する。学生は学習目標漢字のなかに見覚えがあるエレメントが含まれているということが分かったら、安心するようである。

その後、テキストにある例文とともに、読み方および意味を確認していくという「読み」を意識した学習活動に移る。画面には当該の漢字語彙を映し出し、教師が例文を読み出すと、既にその語彙を知っていた者だけでは

なく、コンテキストから推測できた学習者から読み方の声があがる。読み方を「音」で確認したあとは、漢字と音を合致させ漢字語彙を認識する活動を行う。画面上に提示している漢字にルビをふると、それを見て学生は自分の発音と表記があっているかを確認し、書き留める。

「読み」にかんしては、音読ができていても、特に長音や濁音、半濁音、拗音などの表記ミスが見つかることが多いため、読み方は音と文字とで確認する必要がある。

こうして、漢字語彙を「音」と「文字」で結びつけ、そして意味を確認する。意味確認は、媒介語である英語を使用したりもするが、予め準備していた画像を見せ、視覚的に漢字語彙の意味を確認する。私の下手な英語よりも、画像を見せたほうがはるかに分かりやすい。またテキストのイラストよりも印象に残る。そして、当該の漢字語彙の意味にまつわる学生の体験なども尋ねながら、できるだけ教室内のメンバーが言葉を交わすように促す。こうすることで、言葉が使われるときのエピソードと漢字とがクラスのメンバーに共有されるのである。漢字を単体として認識したあと、それが使用されるコンテキストと結びつくことで、単なる記号であったものが、音と意味を兼ね備えた言葉となる。

一通りテキストに挙げられた例文の意味と使用を確認したあとは、再びテレビ画面に戻り、ルビがふられた漢字語彙を見ながら音読する。またフラッシュカードのようにルビなしの漢字ファイルをスライドさせ、「読み」の練習を行う。

以上のように、漢字語彙ひとつひとつに時間をかけた活動に取り組むので、漢字が苦手な学生にとっては苦痛の時間かもしれない。しかし、嫌がられながらも授業を続けていくうちに、「街のなかで目にした漢字も認識できるようになった。」「意味がわかる漢字が増えてきた。」と笑顔で話す学生が増えてくる。そのとき私は心のなかでガッツポーズをするのである。

【参考文献】

鈴木孝夫(1998)『言語文化学ノート』大修館書店